

研究紀要

第35号

—設立40周年記念号—

研究紀要

第35号

—設立40周年記念号—

公益財団法人

埼玉県埋蔵文化財調査事業団

上川名式と花積下層式の交流 —縄文時代前期初頭における文様描出方法の統一化について—	鈴木 宏和
中矢下遺跡A区出土石槍の再検討 —縄文時代前期後半の石槍との比較—	水村 雄功
縄文石器を対象とした型式設定における一試論 —縄文時代前期の押出型石匙を対象に—	入江 直毅
特殊器台弧帯文の施文方法	小林 萌絵
方形周溝墓の研究とキョウダイ原理をめぐって	福田 聖
埼玉県新井堀の内遺跡における埋蔵銭	上野真由美
近世町屋における鍛冶関連遺物の廃棄状況について	高橋 杜人
栗橋宿跡出土のヨーロッパ産陶磁器について	水村 雄功
近世遺跡出土針葉樹材の簡便な保存処理方法について	井上 真帆 野中 仁
古代から教室へのメッセージ事業について	藤田 栄二 田中 広明 堀内 紀明

2021

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目次

巻頭図版

序

上川名式と花積下層式の交流 ……………	鈴木 宏和 (1)
—縄文時代前期初頭における文様描出方法の統一化について—	
中矢下遺跡A区出土石槍の再検討 ……………	水村 雄功 (21)
—縄文時代前期後半の石槍との比較—	
縄文石器を対象とした型式設定における一試論 ……………	入江 直毅 (35)
—縄文時代前期の押出型石匙を対象に—	
特殊器台弧帯文の施文方法 ……………	小林 萌絵 (55)
方形周溝墓の研究とキョウダイ原理をめぐって……………	福田 聖 (65)
埼玉県新井堀の内遺跡における埋蔵銭 ……………	上野真由美 (91)
近世町屋における鍛冶関連遺物の廃棄状況について ……………	高橋 杜人 (107)
栗橋宿跡出土のヨーロッパ産陶磁器について ……………	水村 雄功 (123)
近世遺跡出土針葉樹材の簡便な保存処理方法について ……………	井上 真帆 野中 仁 (147)
古代から教室へのメッセージ事業について ……………	藤田 栄二 田中 広明 堀内 紀明 (157)

埼玉県新井堀の内遺跡における埋蔵銭

上野真由美

要旨 新井堀の内遺跡の発掘調査において、4基の埋蔵銭(註1)が埋設されたと考えられる遺構を検出した。そのうち第3号埋蔵銭は、埋設された当時の状態のまま検出された。全国から検出された埋蔵銭は、偶発的に発見される例が多い。今回検出された埋蔵銭は、中世の館内に埋設されたと確定できたもので、その埋設状況を知ることの出来る貴重な発見であった。ここでは、報告書刊行後に改めて、遺構と遺物について考察し、その銭貨量や埋設時期について考える。

はじめに

埼玉県蓮田市黒浜に所在する新井堀の内遺跡は、中世の館跡として知られていた。平成29年度に初めて発掘調査が行われ、堀跡など中世の遺構が検出された。なかでも、埋設当時のままの状態で見出された埋蔵銭は、国内でも貴重な発見となった。

ここでは、検出された埋蔵銭に関連する遺構や遺物についてまとめ、第3号埋蔵銭について時代背景や埋設時期について検討していく。

1 新井堀の内遺跡の概要

遺跡は、埼玉県蓮田市黒浜に所在する。西側に元荒川左岸が面する標高約15mの黒浜・白岡支台に立地している。

古くから中世館跡として知られており、周辺にも数多くの館跡が分布している(第1図)。遺跡は古くから周囲に堀が巡らされていたと伝えられ、「堀の内」と呼ばれていたとされている。埼玉県教育委員会の中世城館跡調査においては、馬場堀の内館跡として報告されている(埼玉県教育委員会1988)。

遺跡は、小さな谷が複雑に入り込む地形を利用しており、北側の谷は天然の堀の役割を果たしていたと考えられている(第2図)。その北側の谷によって、方形に台地が作り出されており、その

内側の平坦部分が遺跡の範囲と想定されていた。南北方向約200m、東西方向約125～150mの方形の範囲である。

遺跡の南側に谷などの低地はなく、区画する堀跡が検出される可能性がある。北側には林地が残り、土塁状の高まりや、溝状の凹み部分が部分的に見られ、曲輪などが存在したと推定される。また、谷を挟んだ西側の宿下遺跡から堀跡など城館跡関連の遺構が検出され、関連が考えられる。遺跡の範囲である方形部分だけではなく、時期によってはもっと広い範囲が中世に使用されていた可能性もある。

調査は、遺跡の南側を東西方向に細長く横断して行われた(第2図)。調査区は、東側から1区、2区、3区と現在の生活道路によって便宜的に分割されている。

中世の遺構は、2区の西側と3区から主に検出された。特に3区では、遺構が密集して検出された。3区西側には、幅約6m、深さ2mの平行する2条の堀跡が南北方向に掘削され、密集する遺構は堀跡の内側から検出された。遺構の検出面は、堀跡の西側と比較し低かった。基本土層を比較したところ、全体に20～30cm程掘削されていたことがわかった。千葉県内の城館跡でも同様な例が見られ、館の造成時に整地されていたと推定される。遺構の種類は掘立柱建物跡、井戸跡、地下式坑、埋蔵銭、土壇、柱穴などである。柱穴は重



第1図 周辺の城館跡（公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2020）

複して数多く検出され、規模が大きく、柱痕が残るものも多かった。建物の建て替えが複数回行われていたと考えられる。

2 埋蔵銭関連遺構について

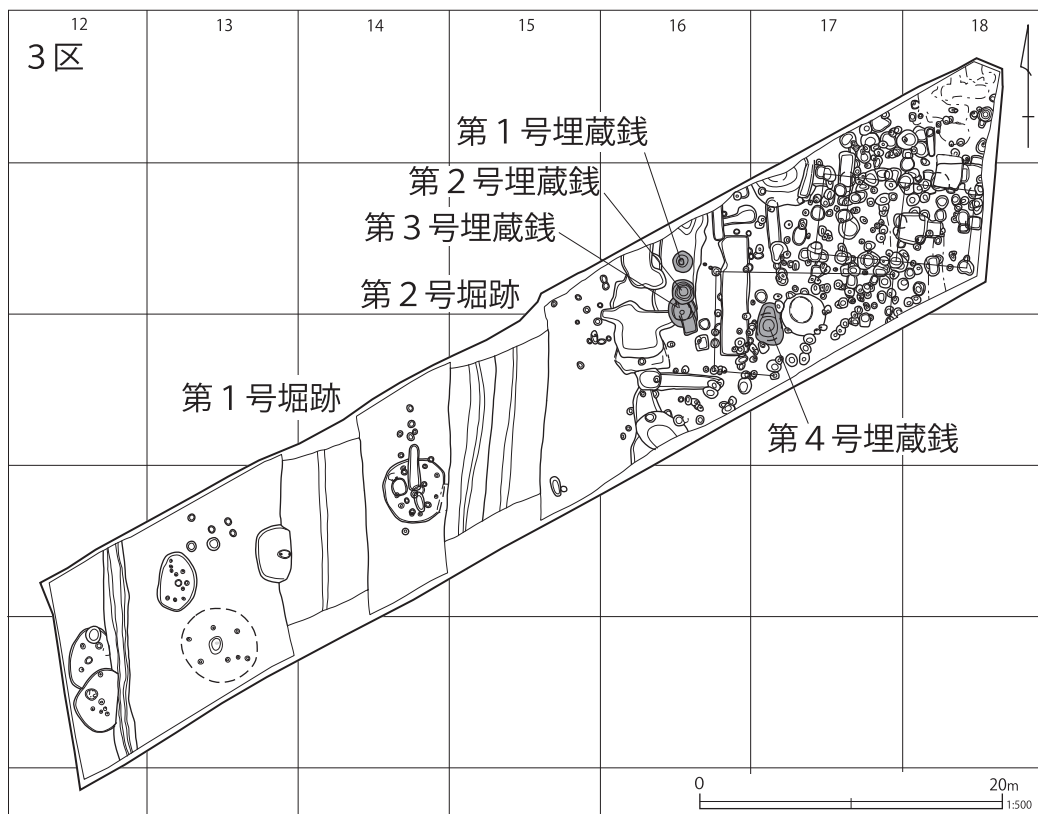
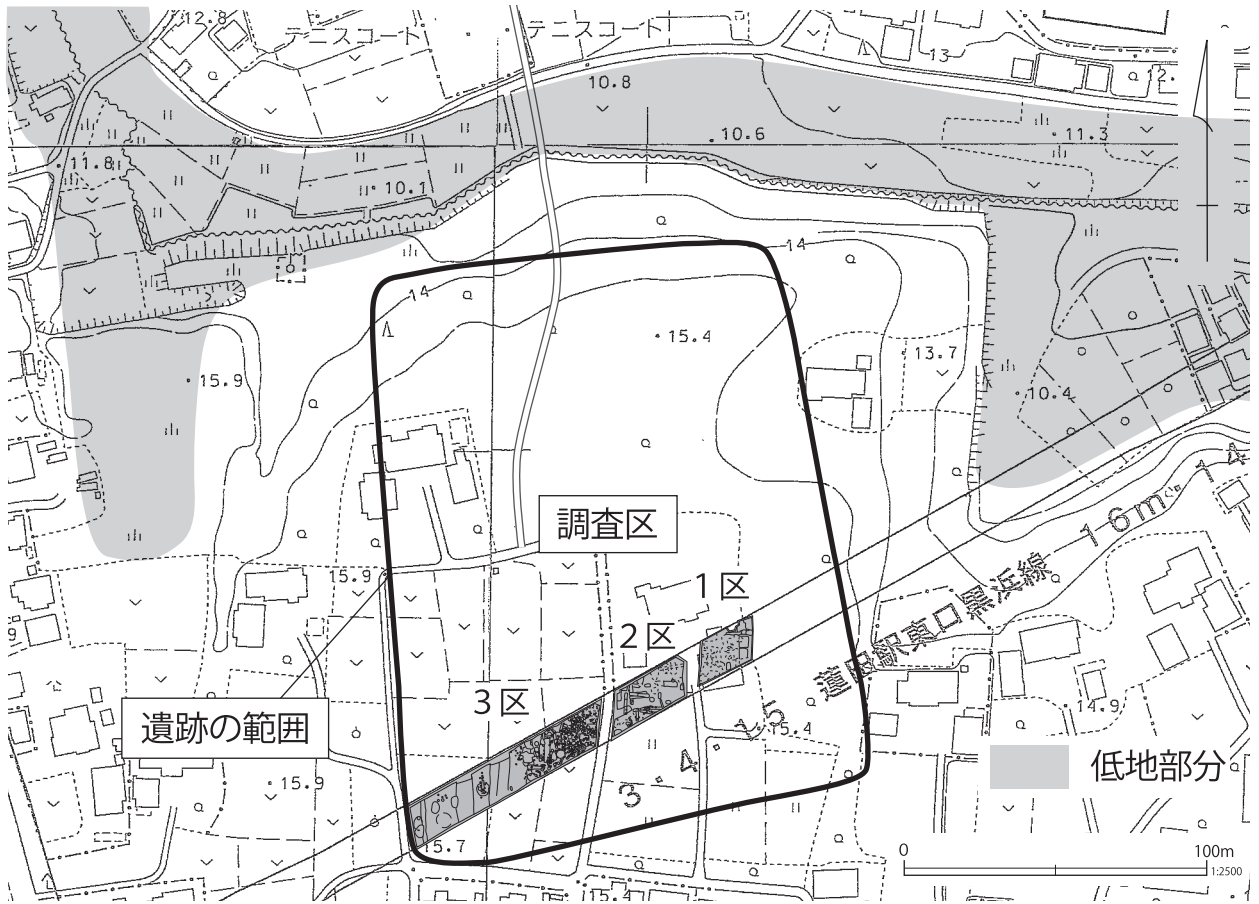
埋蔵銭に関連する遺構については、埋蔵銭が埋設されていたと考えられる遺構が4基、埋蔵銭を取り出すために掘られたと考えられる土壌が2基検出された（第3図）。

遺構は、堀の内側の遺構群の西端からまとめて検出され、堀と掘立柱建物群との間に位置している（第2図）。

埋蔵銭の内、第1、2、4号埋蔵銭は、検出当初は井戸跡として調査された。

井戸跡周辺であったことや、深く円筒状に掘削された様子から、掘削が途中放棄された井戸跡としていた。

その後、第3号埋蔵銭が発見された段階で、そ



第2図 新井堀の内遺跡全体図・埋蔵銭関連遺構 (埤埋文 2020)

これらの遺構について見直しを行い、第1、2、4号埋蔵銭としたものである。

埋蔵銭は、建物の床下に埋められていた可能性もある。第4号埋蔵銭の周囲からは、掘立柱建物が検出されているが、第1～3号埋蔵銭の周辺からは明確な建物は検出することはできなかった。

第1～3号埋蔵銭の周囲には、規模の大きい性格不明土壌が多く検出されており、何らかの関連があった可能性がある。

第1～3号埋蔵銭は、南北方向に並んで検出された(第3図)。第1と2号埋蔵銭はやや離れているが、第2と3号埋蔵銭は近接しており、壁面が重複している。

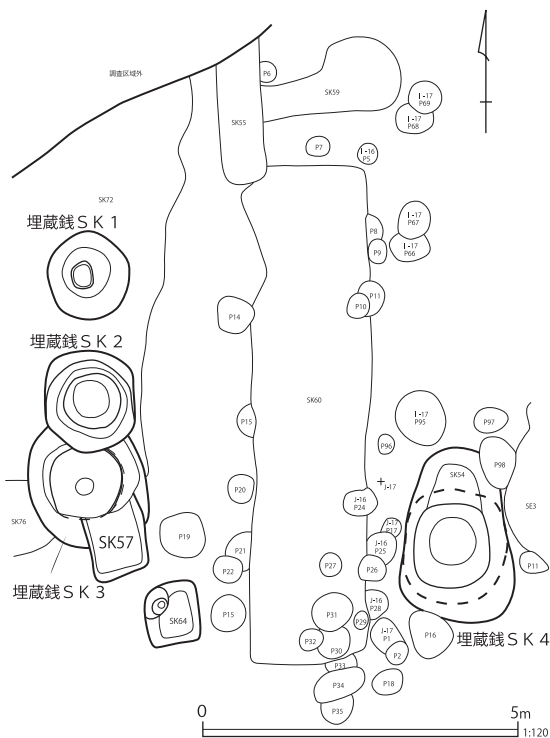
第1号埋蔵銭は、埋蔵銭の中で最も掘削深度が浅かった。覆土上層から多量の常滑甕破片が出土し、第2号埋蔵銭の底面から検出された常滑甕口縁部破片と接合された。遺構がある程度埋まった段階で、甕が遺構内に廃棄されていることから、復元された甕は、第2号埋蔵銭で使用されていた容器であった可能性が高い。遺構の底面は、精査したところ、中央に浅い窪みがあることがわかっ

た。第3号埋蔵銭の常滑甕容器でも底部分の重みのため、底面に同じような窪みが検出されており、これと同様の痕跡であると推定される。

第2号埋蔵銭は、平面形はほぼ円形であるが、断面から壁面が何段階かに分かれて掘られていることが観察された。底面近くが最も狭くなっている。底面中央には、第1号埋蔵銭から検出された甕と同一個体の甕の口縁部が検出された。

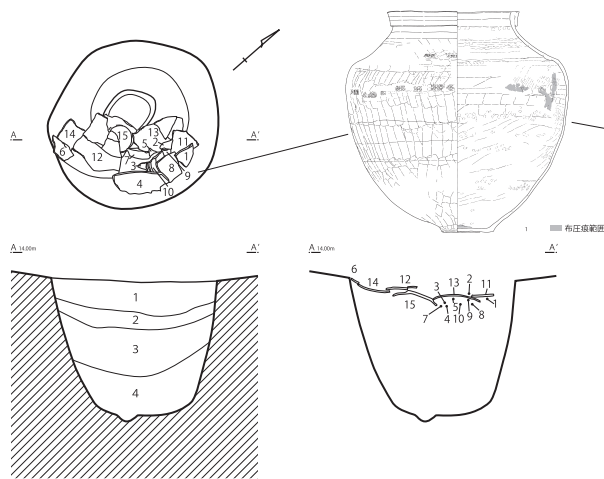
第2号埋蔵銭に連結された第57号土壌は、第2号埋蔵銭の甕を取り出すために掘削されたと考えられる。第3号埋蔵銭でわかるように、埋蔵銭遺構は容器がぎりぎり入る規模で掘削されているため、取り出すための足場が必要であった。第6図は、第2号埋蔵銭の容器と推定される復元した常滑甕を入れ込んだものである。第57号土壌は、平らに0.9mほど掘り進み、その後第2号埋蔵銭に向けて斜めに掘削している。報告では試掘抗の可能性に触れたが、その機能も兼ねていたと考えられる。第57号土壌の掘削は、近世の段階であった可能性もある。そのため、中の銭貨が錆びて塊となってしまう、その場で甕を打ち割って銭貨を取り出したため、割れた甕の破片がすぐ横の第1号埋蔵銭内に廃棄されたとも考えられる。

第3号埋蔵銭は、第57号土壌の土層断面の精査中に見つかった。土層精査中に、地山の壁面と考えられていた部分が、ブロック状に崩れることがわかり、埋土であったことが判明した。第57号土壌底面下のロームブロックを掘り進んだところ、薄い黒褐色土層があり、その直下から緑泥片岩製の円形板石が検出された。しかし、周辺は地山に見える硬くしまったロームが広がっていたため、ロームで埋められた土壌の底面に置かれたと考えた。ところがその円形の板石が、府中市で検出された埋蔵銭の石蓋と同じ形状であることがわかり、板石の下に銭貨が入った甕が存在する可能性が指摘され、その下に埋蔵銭容器が埋められていたことがわかった。



第3図 埋蔵銭関連遺構(埤埋文2020)

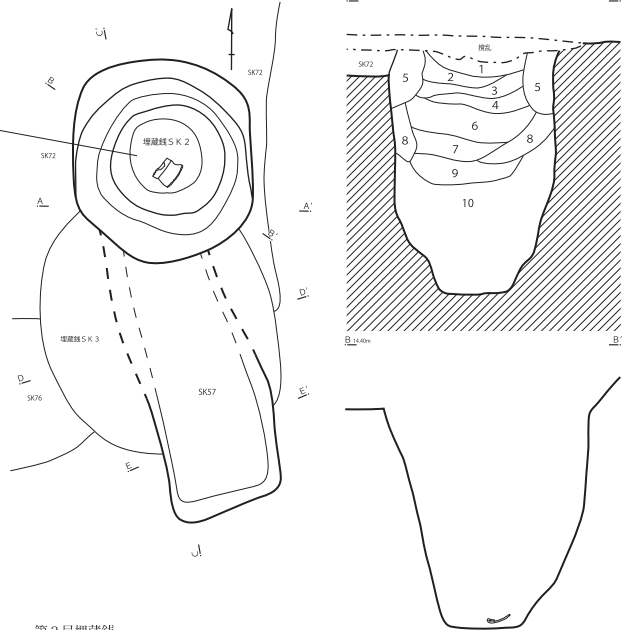
第1号埋蔵銭



埋蔵銭 S K 1

- 1 褐色土 ローム粒子(粗)多量 ロームブロック(1~2cm大)まばらに多量 炭化物
- 2 褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1cm大)・炭化物少量 黒色土混じる
- 3 褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~2cm大)多量
- 4 黒色土 ローム粒子少量 炭化物微量

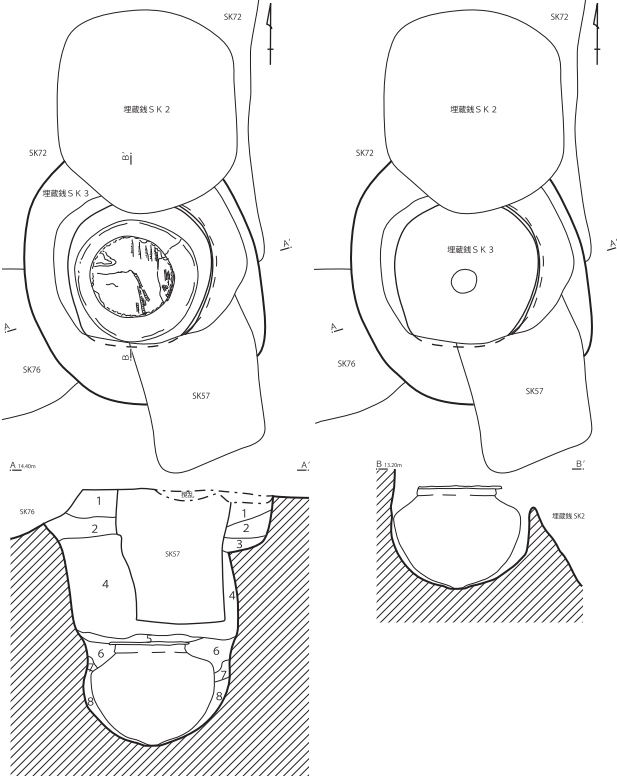
第2号埋蔵銭・S K 57



第2号埋蔵銭

- 1 褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~3cm大)多量 炭化物少量
- 2 褐色土 ローム粒子少量 ロームブロック(1cm大)・炭化物微量
- 3 褐色土 ローム粒子(粗)多量 ロームブロック(10cm大)微量 炭化物少量
- 4 褐色土 ローム粒子少量 ロームブロック(1cm大)・炭化物微量
- 5 にぶい黄褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(3~5cm大)多量 ソフトロームが主体
- 6 褐色土 ローム粒子(粗)多量
- 7 褐色土 ローム粒子(粗)少量 ロームブロック(1~10cm大)微量 炭化物少量
- 8 褐色土 ローム粒子(粗)多量 ロームブロック(1~3cm大)密に多量 炭化物微量
- 9 褐色土 ローム粒子(粗)少量
- 10 褐色土 ローム粒子(粗)多量 ロームブロック(1~2cm大)密に多量 炭化物微量

第3号埋蔵銭

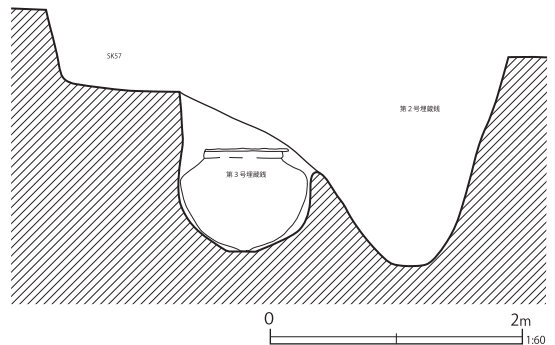


第3号埋蔵銭

- 1 黒褐色土 しまり強 粘性あり ローム粗粒(Φ1cm)・炭化物粒子(Φ5mm)微量 均質な土 第76号土壌
- 2 黒褐色土 しまりやや弱 粘性弱 ロームブロック(Φ3cm)・ローム粗粒(Φ1cm)多量 第76号土壌
- 3 黒褐色土 しまり強 ローム(ブラックバンド)の崩落土
- 4 褐色土 しまりやや強 粘性あり Φ3~5cm大のロームブロックが主体の層 黒色土ブロック(Φ2cm)微量 (短期の埋土)
- 5 黒褐色土 しまりあり 粘性あり 比較的均質な層で片岩の蓋をおおっている(有機物が腐食した感じではなく、当初より土壌化していたと考えられる)
- 6 褐色土 ロームブロックΦ5cmほど主体 基本的にはフタ石より上の土と同じしまり・粘性あり 炭化物(繊維状の細かいもの多く含む)
- 7 暗褐色土 6層より黒色味強い しまりあり 粘性あり ロームブロックΦ1~2cm少量入るが 6層より細かい土から成る
- 8 褐色土 6層とほぼ同質だがより大きいロームブロック(ハードローム)Φ10cmほどを混入

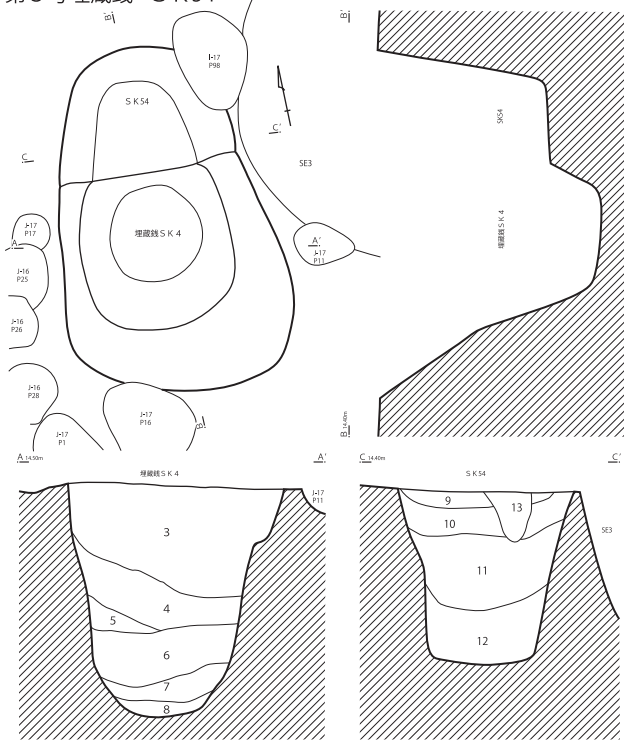
S K 57

- 1 黒褐色土 しまり強 1層より大きいロームブロック(Φ5cmまで)多量 磁器碗破片出土
- 2 褐色土 しまりやや弱 ロームブロック(Φ3cm)とローム粗粒(Φ1cm)の層 一部黒褐色土を横縞状に混じる
- 3 黒褐色土 しまり弱 粘性あり ローム粗粒(Φ1cm)少量
- 4 黒褐色土 しまり弱 粘性弱 ローム粗粒(Φ1cm)が4割程度混じる ロームブロック(Φ3cm)少量
- 5 黒褐色土 しまり弱 粘性あり ロームブロック(Φ2~3cm)少量
- 6 黒褐色土 しまり極めて弱い ローム粗粒(Φ1cm)少量 しまりが6層よりさらに弱い



第4図 第1~3号埋蔵銭・第57号土壌(埤理文 2020)

第3号埋蔵銭・S K 54



埋蔵銭 S K 4・S K 54

1 褐色土	ローム粒子(粗)多量	ロームブロック(1~3cm大)密に多量
	黒色土が帯状に入る	
2 黒色土	ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~2cm大)多量	
3 褐色土	ローム粒子(粗)多量	ロームブロック(1~2cm大)微量
	炭化物少量	
4 褐色土	ローム粒子(粗)多量	ロームブロック(1~3cm大)密に多量
5 黒色土	ローム粒子少量	ロームブロック(1~2cm大)微量
6 にぶい黄褐色土	ソフトロームが多量に混入	
7 にぶい黄褐色土	ソフトローム多量	ロームブロック多量
8 にぶい黄褐色土	ロームブロック多量	
9 褐色土	ローム粒子(粗)多量	ソフトローム多量に混入
10 褐色土	ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~3cm大)・ソフトローム多量	
11 褐色土	ローム粒子(粗)多量	ロームブロック(1~10cm大)密に多量
	ソフトローム多量	
12 褐色土	ローム粒子(粗)多量	ロームブロック(1~3cm大)密に多量
13 褐色土	ローム粒子(粗)・ロームブロック(1cm大)少量(グリッドビット)	

第5図 第4号埋蔵銭・第54号土壌(埤埋文 2020)

第2号埋蔵銭と第3号埋蔵銭は、並べるように埋設されていた。第6図の埋蔵銭埋設推定図からわかるように、あまりに近いため、間が繋がってしまっているが、同時期に埋設されたのか、新旧関係があったかについては、第2号埋蔵銭を取り出すために掘削された第57号土壌のため不明である。

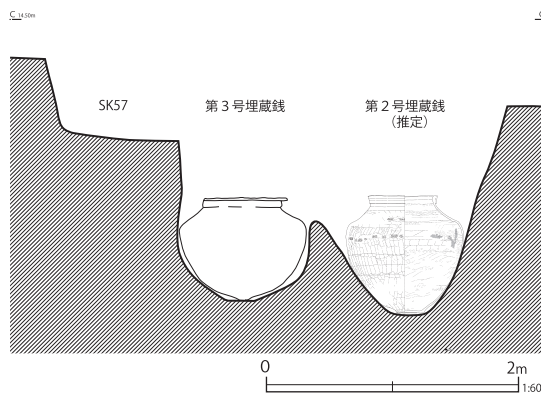
第4号埋蔵銭は、残された穴の形状が他の埋蔵銭と同様で、地表面から2m近く掘削されている。第2号埋蔵銭と同様、連結する第54号土壌が検出された。埋蔵銭を取り出すための足場と考えら

れる。重複する中世の柱穴が、土壌が埋め戻された後に掘り込まれている様子から、第4号埋蔵銭は中世の段階で掘り出されたものと考えられる。

第3号埋蔵銭の出土状況でわかったことは、遺構確認面から約2m深く掘られた土壌内に容器を設置した後、1m以上に亘って、地山にカモフラージュするようローム土が埋められていたということである。

つまり、見た目ではどこに埋めたかはわからないよう工夫していたのである。これらが建物の床下などに埋設されたとしても、建物が失われてしまうと、その正確な位置はわからなくなってしまう。しかしながら、第2号埋蔵銭は埋設後かなり時間が経過してから掘削されていることから、掘削した者はその位置を何らかの方法で知っていたと思われる。

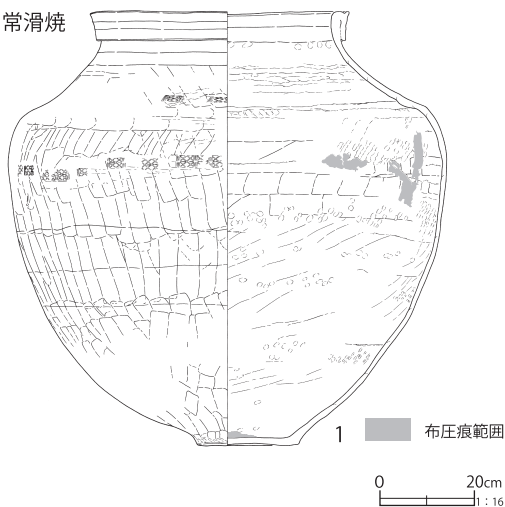
では何故、第3号埋蔵銭のみが残されたのか。その存在自体が、わからなかったという可能性もあるが、近世に掘削された第2号埋蔵銭から取り出された銭貨が、当時の貨幣流通にそぐわないこ



第6図 埋蔵銭 容器埋設状況推定図(埤埋文 2020 一部改変)

第1号埋蔵銭

常滑焼



布圧痕



押印



0 5cm
1:4

第7図 第1号埋蔵銭出土遺物 (埼玉文 2020)

とがわかり、そのまま放置されたのではないとも推察できる。

3 埋蔵銭出土遺物について

ここでは、埋蔵銭に関連する遺物について、考えていく。

第7図1は第1号埋蔵銭から出土した常滑焼の大甕である。前項でも触れたように、第2号埋蔵銭の容器として使用されたものが、壊されて廃棄されたものと考えられる。口縁部は幅広い縁帯を形成し、常滑編年9型式(1400～1450年)の特徴を備えている。頸部下位と肩部直下に巡っている押印は、縦線文に「×」文の組み合わせで、中央に横線が一条入るタイプで、Cb1類に分類される(愛知県史編さん委員会 2012)。遺物を接合する段階で、内面の底面と胴部上位を中心に布の痕跡が付着していることがわかった。この痕跡については、自然科学分析を行ったところ、それ自体が圧痕であり、布の繊維本体は残存していないことがわかった。残された圧痕から推測された繊維は、カラムシなどのイラクサ科の繊維か、アサである可能性が高いとされた。布圧痕から、放射性炭素年代測定が行われ、15世紀前半から中ごろの暦年代が示された。底面のほぼ中央部に

僅かながら緑青が確認され、銅銭が入られていた痕跡と思われる。

第8図は、第3号埋蔵銭から出土した遺物である。1は埋蔵銭を収めた常滑焼の大甕である器形が片方によって若干潰れ、肩部や口縁部に歪みが生じている。第7図1に比べ、低平な印象が強い。口縁部は幅広の縁帯が巡り、典型的な常滑9型式の特徴を備えている。押印は肩部の上と下と合わせて2段確認される。同じ意匠のもので、縦線文の間に三重の亀甲文が3つ配された構成である。甕には欠損や補修痕が認められ、埋蔵銭容器として用いられる前に何らかの用途で使用されたものと考えられる。補修痕は、内外面に認められ、器面に生じたヒビを覆うように布を当てたものであり、これを器面に接着させている。第7図1と本資料は、胴部径が90cm程度にもなるが、このサイズの常滑焼甕は出土例がかなり限られている。関東地方では神奈川県鎌倉地域や国府所在地の東京都府中地域に集中し、他に東京湾沿岸地域で点々と出土している(白石・村山 2011)。第9図は、埋蔵銭の容器として使用された常滑焼の大甕を集成したものである。1、2は本遺跡の第3号埋蔵銭、第1号埋蔵銭、3は鴻巣市出土の舟塚の古銭と甕、4、5は武蔵府中大量出土銭1・

2、6は鎌倉市浄智寺下遺跡出土常滑大甕である。甕の時期は、1～4が15世紀前半、5は4よりやや古い様相を持っている。6は14世紀前半である。2以外は埋設当時の銭貨がそのまま残っていたもので、3が発見当時で約4万枚（栗原1987）、4が60,026枚、5が90,427枚、6が18万枚ほどである。最も新しい銭貨が、1、2、6が永楽通寶（初鑄1408年）、3が咸淳元寶（初鑄1265年）、4、5が朝鮮通寶（初鑄1423年）で、甕の時期の順と、埋設銭貨の時期順が合っていないことがわかる。つまり、埋蔵銭に使用された常滑甕は、埋蔵銭容器として新たに手配されたものではなく、長い年月使用された中古品が使われていたと考えられる。

2は常滑焼甕の蓋として用いられた石蓋である。石質は良質な緑泥片岩で、色調は緑灰色、微細な磁鉄鉱を含む。重量は19.5kgである。実測図の上・下は、出土状況の上・下と一致させている。上面には全体的に押し削り痕といわれる工具痕が認められる。押し削り痕は武蔵型板碑の背面に多くみられ、平ノミの頭を玄能（ハンマー）で叩くことにより形成されるものと考えられる（村山2019）。押し削り痕が密な部分は、石材面が周囲より高く、全体でも厚手の部分であった。高まりを削り、面の高低のバランスをとることを意図した加工である蓋然性が高い。側縁部は叩打によって円形に成形されており、打ち欠きによる剥離は上面のみに認められる。なお、ノミ幅は上下面とも1.0cm程である。側縁に沿った部分には、縁から7～15mm程離れて、円形に罫書き線が残されている。罫書き線の直径は62.5cmである。最終的には罫書き線より概ね一寸分大きく成形されている。なお、石蓋を外した際、下面に銭貨が一枚貼りついていて、当初は石蓋に接する高さまで銭貨が詰められていたものが、沈降したものと推定される。

緑泥片岩製石蓋はその形状や重量などから、木

の蓋などと同様に、開閉する蓋として使用されたものではないことは明らかである。蓋を閉めたらそのまま開けることがない前提で製作されたと考えられる。地中に埋設された甕の蓋として使用することが前提の製品であった可能性が高い。蓋を閉めた後、土で埋められても内部に土が流れ込まないようにするためである。従来の用途については、甕棺墓の蓋として製作されていたとも考えられる。しかし、出土例がごく少ないため、その需要方法や流通方法については不明である。第10図は、緑泥片岩製石蓋の集成図である。図から、1～3のサイズと、4、5のサイズと2種類のサイズがあったことがわかる。資料が少ないため断言はできないが、石蓋の製作場では、ある程度の既製サイズがあった可能性が考えられる。3は府中市の大量出土銭甕の蓋として使用されたものであるが、口の大きさに合わないため、石蓋を打ち割って重なり合わせて大きさを調整している。それぞれ甕の口縁部の大きさに合わせて、石蓋製作を発注しているのならこのようなことは起きなかったと考えられる。

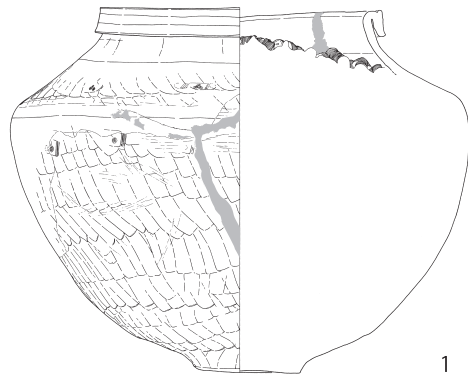
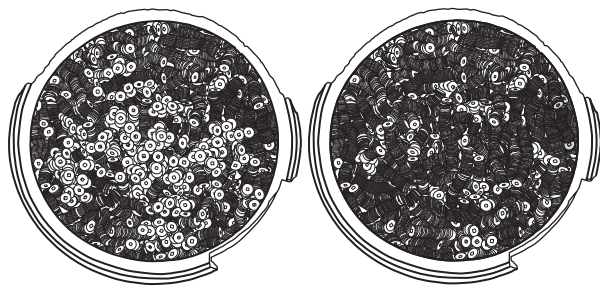
3は木簡である。木簡は、口縁部から検出された。文字が横となる方向で、左端が口縁に掛けられ石蓋に押さえられた状態で見つかった。

樹種については、非破壊での分析ができないため不明である。縦75mm、幅79mm、厚さ1mmのほぼ方形で、下端の繊維がやや腐食するが、全体の形状を留める。表面の墨書は「三月□□（日カ）／いのとし／二百六十／くわん□□」（原文縦書き）と判読される。内容は、埋蔵銭の蓋を閉じた時点の年月日と内容量であると推定される。つまり、年月日は亥年の三月□日、銭貨の量が260貫であったということである。

4 第3号埋蔵銭に埋設された銭貨の量

第3号埋蔵銭が出土した当時から問題となっていたのは、常滑甕内の実際の銭貨量である。木簡

常滑焼甕・銭貨



布(漆塗)補修範囲

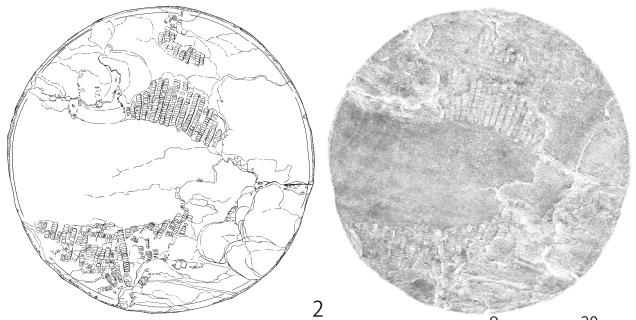
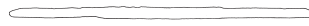
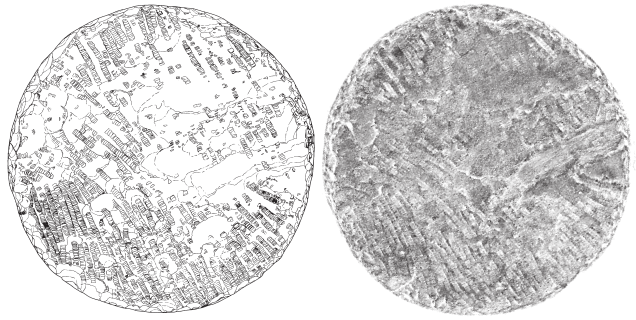
1
0 20cm
1:16

押印



0 5cm
1:4

石蓋



2
0 20cm
1:16

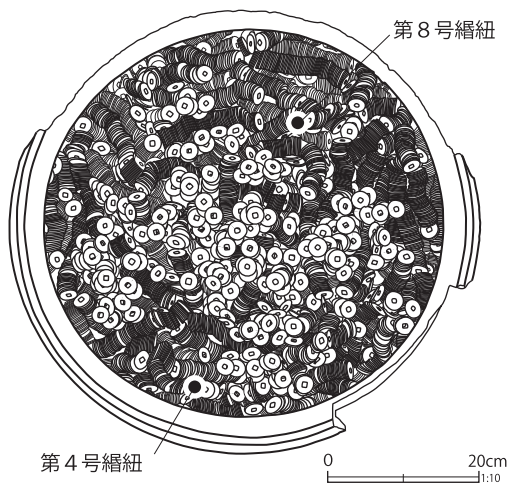
木簡



三月□□(日カ)
いのとし
二百六十
くわん□□

3
0 2.5cm
1:34

緇紐



第4号緇紐
0 20cm
1:10

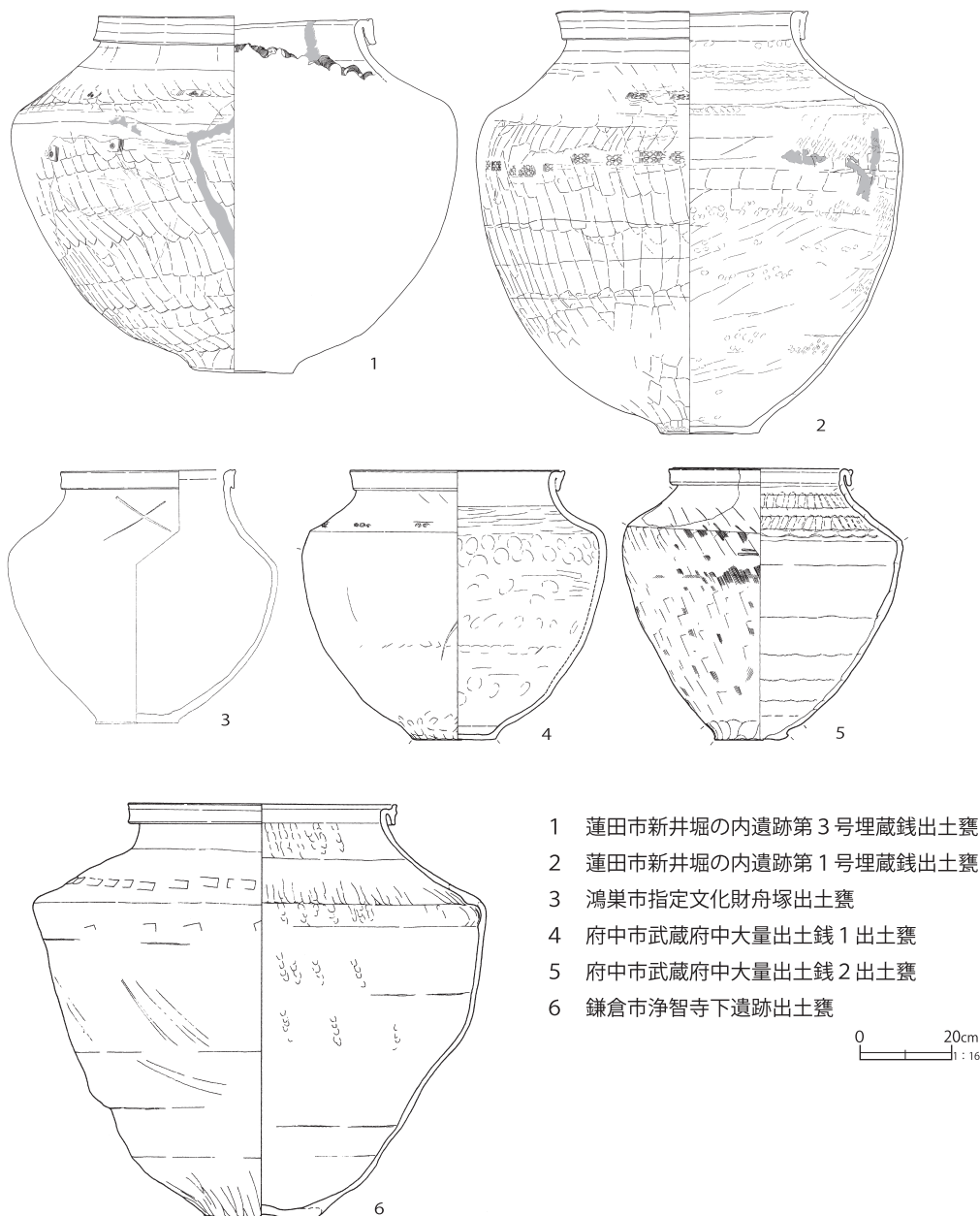


第4号緇紐



第8号緇紐

第8図 第3号埋蔵銭出土遺物(埒埋文 2020)



- 1 蓮田市新井堀の内遺跡第3号埋蔵銭出土甕
- 2 蓮田市新井堀の内遺跡第1号埋蔵銭出土甕
- 3 鴻巣市指定文化財冨塚出土甕
- 4 府中市武蔵府中大量出土銭1出土甕
- 5 府中市武蔵府中大量出土銭2出土甕
- 6 鎌倉市浄智寺下遺跡出土甕

0 20cm
1 : 16

第9図 埋蔵銭使用常滑焼甕（埤埋文2020）

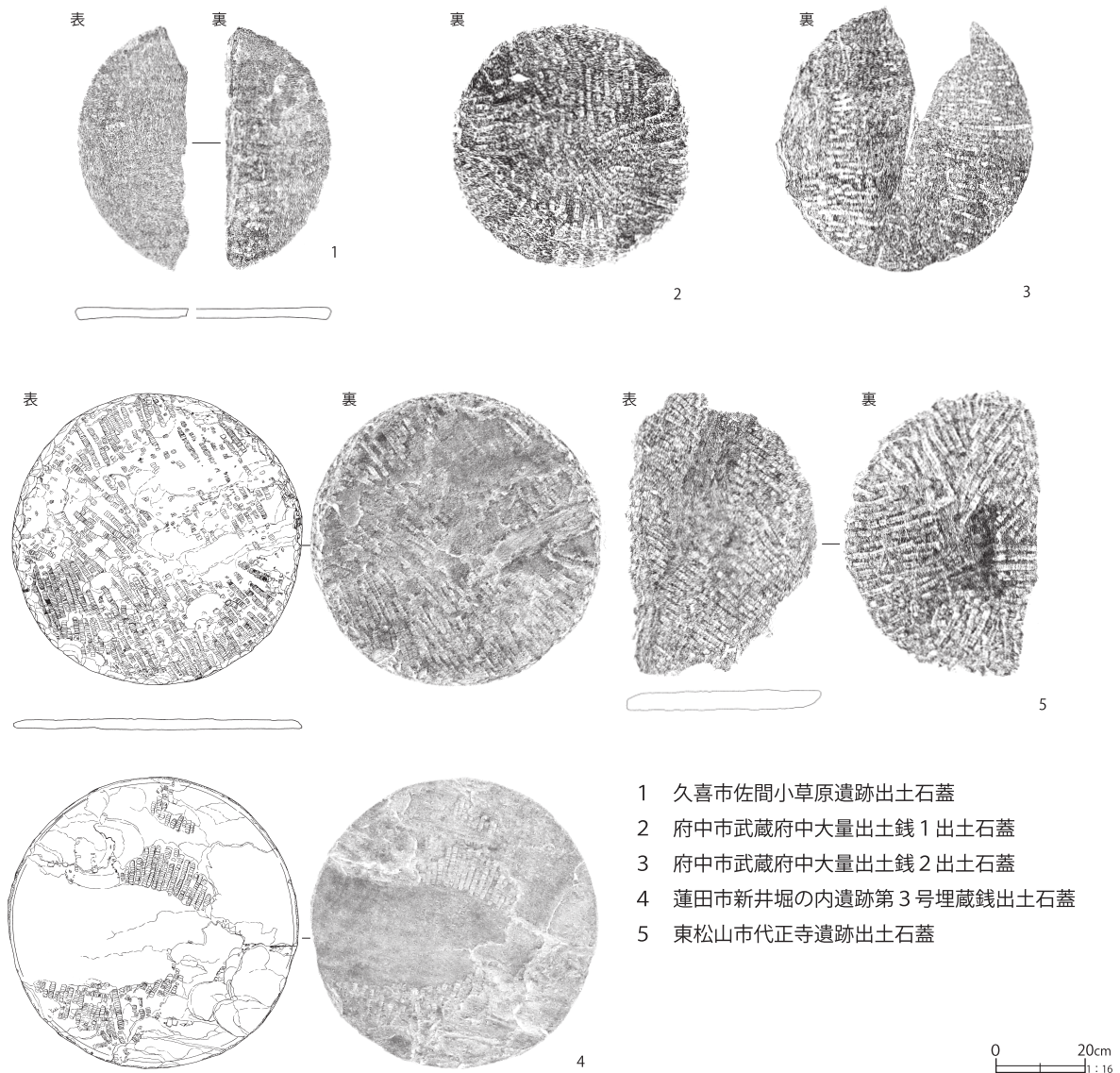
に記述された260貫が内容量を伝えているとすれば、1貫が、1000文であることから、26万枚の銭貨が入っていることとなる。

当時の1文銭は、100文を1緡としてまとめられており、その10緡分が1貫とされている。第3号埋蔵銭も、表面のバラバラに散っていた銭貨を取り上げると、その下からは緡になった状態で銭貨が検出された（第8図）。緡は、銭貨の孔に藁などでできた紐を通してひとまとめにしたものである。第3号埋蔵銭でも紐を通して、緡状に

銭貨をまとめている。整理では、表面に散ったバラバラの銭貨と、残りの良い2緡分を取り上げて調査している（第1表）。

銭貨は当時、省百法という商慣習により、1緡は97枚を綴って、100文と見なしていたとされている（本郷2013）。実際、取り上げた第1、2号緡銭もそれぞれ97枚ずつが綴られていた。

それからすれば、納められた260貫の実数は、1文銭が25万2千2百枚分となる。それだけの量が入っているとすれば、単体の甕内から出土し



- 1 久喜市佐間小草原遺跡出土石蓋
- 2 府中市武蔵府中大量出土銭1出土石蓋
- 3 府中市武蔵府中大量出土銭2出土石蓋
- 4 蓮田市新井堀の内遺跡第3号埋蔵銭出土石蓋
- 5 東松山市代正寺遺跡出土石蓋

第10図 緑泥片岩製石蓋（埤埋文 2020）

た銭貨量としては、現状では日本で一番多い。

しかし、発見当時の状態で保存する観点から、甕内の銭貨は取り出さないため、それを証明することは難しい。とはいえ、内容量を確かめることは、今後第3号埋蔵銭を研究するうえで、大切なことである。

そこで、整理作業では、常滑甕ごと重量を量っている。計測の結果、重量は963キログラムであった。

当時流通していた渡来銭は、種類が多く大きさも様々であったが、平均して3.5グラム前後とされている（本郷 2013）。第3号埋蔵銭内の銭貨

は錆びており、それをそのまま使用することができないため、取り上げた緡銭から類推してみる。

第1号緡銭は、97枚で349.5グラム、第2号緡銭は、97枚で343.5グラムであった。2つを平均すると、346.4グラムで、1貫はその10倍の3.464キログラムとなる。それが260貫入っているとすると、その260倍で900.64キログラムが銭貨の重量であったと推定できる。

全重量が963キログラムであることから、常滑甕の重量を差し引いても、銭貨が900.64キログラム分入っていることは可能である。実際に確かめられないため、確実ではないが、木簡の記述

第1表 第3号埋蔵銭出土銭貨一覧表

第3号埋蔵銭一～三面

銭貨名	初鑄年・国	枚数
開元通寶	621 唐	27
軋元重寶	758 唐	4
唐國通寶	959 南唐	2
太平通寶	976 北宋	3
淳化元寶	990 北宋	1
至道元寶	995 北宋	9
咸平元寶	998 北宋	6
景德元寶	1004 北宋	13
祥符元寶	1009 北宋	5
祥符通寶	1009 北宋	4
天禧通寶	1017 北宋	8
天聖元寶	1023 北宋	8
明道元寶	1032 北宋	3
景祐元寶	1034 北宋	7
嘉祐通寶	1034 北宋	5
皇宋通寶	1038 北宋	35
嘉祐元寶	1056 北宋	2
治平通寶	1064 北宋	1
治平元寶	1064 北宋	5
熙寧元寶	1068 北宋	27
元豐通寶	1078 北宋	43
元祐通寶	1086 北宋	16
紹聖元寶	1094 北宋	14
元符通寶	1098 北宋	5
聖宋元寶	1101 北宋	11
大觀通寶	1107 北宋	6
政和通寶	1111 北宋	10
宣和通寶	1119 北宋	2
紹熙元寶	1190 南宋	1
嘉泰通寶	1201 南宋	3
開禧通寶	1205 南宋	1
嘉定通寶	1208 南宋	1
淳祐元寶	1241 南宋	1
景定元寶	1260 南宋	2
洪武通寶	1368 明	12
永樂通寶	1408 明	30
元□通寶		1
□□元寶		1
□□□寶		1
不明		4
合計		340

第1号緡銭

銭貨名	初鑄年・国	枚数
開元通寶	621 唐	4
軋元重寶	758 唐	1
太平通寶	976 北宋	1
至道元寶	995 北宋	3
咸平元寶	998 北宋	1
景德元寶	1004 北宋	2
祥符元寶	1009 北宋	5
祥符通寶	1009 北宋	1
天禧通寶	1017 北宋	2
天聖元寶	1023 北宋	1
景祐元寶	1034 北宋	2
皇宋通寶	1038 北宋	16
嘉祐通寶	1056 北宋	1
治平元寶	1064 北宋	3
熙寧元寶	1068 北宋	8
元豐通寶	1078 北宋	9
元祐通寶	1086 北宋	13
紹聖元寶	1094 北宋	5
聖宋元寶	1101 北宋	2
政和通寶	1111 北宋	2
淳祐元寶	1241 南宋	1
洪武通寶	1368 明	3
永樂通寶	1408 明	10
景□元寶		1
合計		97

第2号緡銭

銭貨名	初鑄年・国	枚数
開元通寶	621 唐	5
光天元寶	918 前蜀	1
淳化元寶	990 北宋	1
至道元寶	995 北宋	2
景德元寶	1004 北宋	4
祥符通寶	1009 北宋	3
祥符元寶	1009 北宋	1
天禧通寶	1017 北宋	2
天聖元寶	1023 北宋	4
明道元寶	1032 北宋	1
景祐元寶	1034 北宋	3
皇宋通寶	1038 北宋	10
至和通寶	1054 北宋	1
至和元寶	1054 北宋	1
嘉祐通寶	1056 北宋	3
治平元寶	1064 北宋	1
熙寧元寶	1068 北宋	11
元豐通寶	1078 北宋	10
元祐通寶	1086 北宋	1
紹聖元寶	1094 北宋	5
元符通寶	1098 北宋	7
聖宋元寶	1101 北宋	2
政和通寶	1111 北宋	3
宣和通寶	1119 北宋	1
洪武通寶	1368 明	4
永樂通寶	1408 明	7
□平元寶		1
□□元寶		1
□□□寶		1
合計		97

第3号緡銭

銭貨名	初鑄年・国	枚数
開元通寶	621 唐	1
天禧通寶	1017 北宋	1
至和元寶	1054 北宋	1
嘉祐通寶	1056 北宋	1
元豐通寶	1078 北宋	1
元祐通寶	1086 北宋	2
紹聖元寶	1094 北宋	1
政和通寶	1111 北宋	1
永樂通寶	1408 明	1
合計		10

のとおり 260 貫が、常滑甕に納められた可能性は非常に高い。

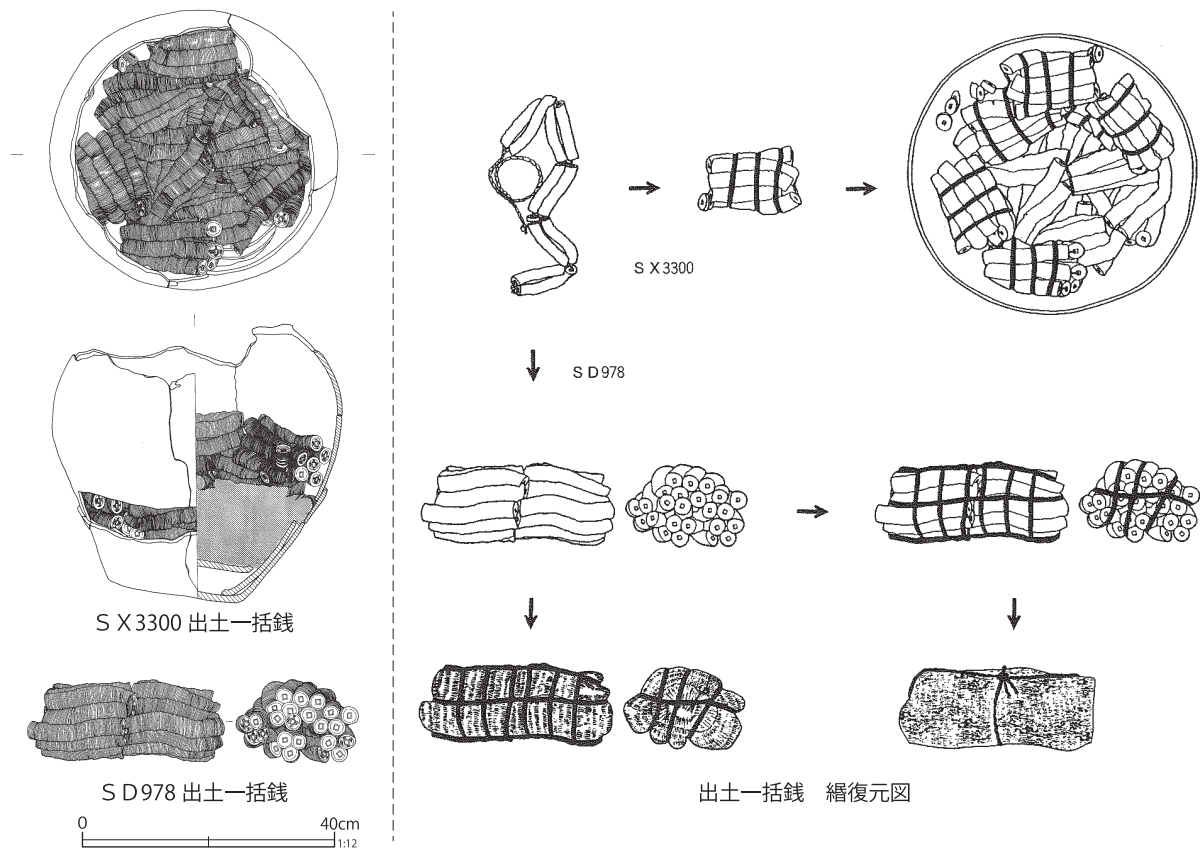
5 第3号埋蔵銭にどのように納められたのか

前項で、指摘したように第3号埋蔵銭内には、260 貫の銭貨が納められていた可能性が高い。では、それらの銭貨は、どのように常滑甕に入れられたのだろうか。

10 緡で 1 貫の銭貨は、どのような状態であっ

たのだろうか。13 世紀末に書かれたとされる『一遍聖絵』内に、緡銭状態の銭貨が掘り出される様子が描かれている。それには、緡と緡が結ばれ、掘り出された緡が輪のようになって描かれている(本郷 2013)。つまり、1 貫は 10 緡分を結んで、輪のようにしていたと考えられる。

また、京都の市中と郊外の様子を、17 世紀初め頃に描かれたと考えられる洛中洛外図(舟木本)には、金融業を営む店先に座る男の後ろの棚に、



第 11 図 草戸千軒町遺跡出土一括銭 (広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1994)

縄をかけて梱包した緋銭の塊が描かれている (広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1994)。

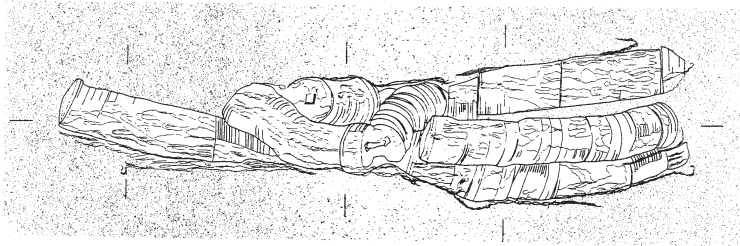
このような状態で検出された例として、草戸千軒町遺跡が挙げられる (第 11 図)。土坑内から大量の銭を埋蔵した甕 (SX3300)、流路 (SD978) から一括銭 (銭塊) が出土している。甕 (SX3300) の埋設時期は、13 世紀前半以降、流路 (SD978) の一括銭 (銭塊) は、14 世紀前半以降とされている (広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1994)。

第 11 図は、緋銭の状態を復元したものである。甕 (SX3300) の銭貨は、10 緋を繋げた一貫を一緋ごとに折り曲げ、さらに藁縄で周囲を縛って梱包し、甕に納めたと復元している。また、SD978 の一括銭 (銭塊) は、一貫を 5 個集めそれぞれ一緋毎に折曲げ、小口を揃えて藁紐で周囲を縛っていたとして復元している。SD978 の一括銭 (銭塊) については、紐で縛る前後に薦または箆で包まれていたとされている。

第 12 図は加須市 (旧騎西町) 騎西城跡出土の 16 世紀後半の薦入り銭貨である (騎西町教育委員会 2005)。銭貨の運搬は、このように薦や箆などに包まれていたのではないだろうか。

前項で示したように、1 貫が約 3.5 キログラムとすれば、5 貫で約 17.5 キログラム、10 貫で約 35 キログラムとなる。持ち運びには、10 貫分では重く、草戸千軒町遺跡 SD978 のように、5 貫包みの方が便利と考えられる。

新井堀の内遺跡第 1 号埋蔵銭の、常滑甕内面には、底面と胴部上位を中心に布の痕跡が付着して残っていた。内面壁に緑青や銭貨の痕跡がほとんど認められなかった。第 3 号埋蔵銭内の銭貨が錆びて緑青が吹いていたことから、銭貨がそのまま入っていたとすれば、銭貨と触れる内面壁には、銭貨の緑青の痕跡が顕著に残るはずである。現に第 9 図 3 の舟塚出土甕の内面壁には、銭貨の緑青の痕跡が残されている。つまり、第 1 号埋蔵銭内の



第 12 図 騎西城跡 障子堀出土薦入り銭貨（騎西町教育委員会 2005）

銭貨は、布圧痕跡が残されていることからアサ布等に包まれて銭貨が入れられていたと考えられる。

以上のことから、第3号埋蔵銭内銭貨がどのように納められたのか考えていく。

銭貨は、その量から常滑甕が土壌内に設置された後に入れられたと考えられる。甕の器高は75cmで、狭い竪穴に降りて銭貨を1貫ずつ底から敷きつめることはほぼ不可能である。第1号埋蔵銭で推定したように、梱包された塊ごとに入れたと思われる。また、先述したように持ち運ぶための塊は、5貫分であった可能性が高い。木簡の記述とおりでであるとすれば、5貫が52セット分必要であったと考えられる。

しかし、石蓋を開けた状態で残された銭貨の様子からは、塊状になった様子や、布等の痕跡は見られなかった。口縁近くについては、梱包を解いて1貫ずつ敷きつめなければ、銭貨が納まりきらなくなったと推測される。よく観察すれば、10緡分の単位が特定できる可能性があるが、整理作業当時はそこまで特定することができなかった。最後に石蓋が閉まらなくなったらしく、最上には緡をばらして銭貨が散っていた。

260貫を納めることは、予め決まっていたかどうかは不明であるが、当時は大きな単位が10貫であったと考えられたため、10の倍数分を納め

ることは決まっていたと思われる。

6 埋蔵銭が埋められた年代について

第3号埋蔵銭が埋設された時期については、報告書に記載されたとおりである。常滑甕の年代は15世紀前半、最も新しい銭貨である永楽通寶の初鑄年（1408年）、緡紐や漆布の年代測定結果を総合して、15世紀中頃から後半の間とした。この年代幅の内、どの時点で埋設されたかについては、木簡の記載からある程度推定できる。

前述したように、木簡には「いのとし」と記されていた。15世紀中頃から後半の間の亥年は、嘉吉3年（1443年）、康正元年（1455年）、応仁元年（1467年）、文明11年（1479年）、延徳3年（1491年）である。

上記亥年のうちの1つが、埋設された年代となる。

7 当時の時代背景と埋設された時期

ここでは、前項で示した亥年のうち、どの年代が最も近いかを当時の時代背景から考えていく。

上記の亥年のうち、歴史上有名な年は応仁元年（1467年）である。応仁の乱が起こった年で、京都で起きた戦乱がやがて全国的な戦国時代へと発展していく端緒となった乱である。

ここで、改めて新井堀の内遺跡の埋蔵銭の性格を考えていく。

第3号埋蔵銭の常滑甕に納められた銭貨の量は、全国一とも言える量であった。そして、埋めた年月日と銭貨量を記述して石蓋で閉じた常滑甕は、地中深く埋められ、埋め戻される時には地山と同じ土を使用し、埋められた穴が見た目ではわからないようにしていた。つまり、埋められた大量の銭貨は、いつでも取り出せる状況ではなく、有事に備えると共に、隠置したと考える方が自然であると考えられる。大量の銭貨を隠置しなければいけない程、この地域が乱れた状況であった年代はいつであったのだろうか。

応仁の乱の年は、京都で戦乱が繰り広げられたのであり、関東との関係は薄いと考えられる。

では、この地域が乱れ、地中深く銭貨を隠す必要に迫られたのは、いつであったのだろうか。

ここで注目されるのは、「享徳の乱」である。享徳の乱は、享徳3年（1454年）に鎌倉公方である足利成氏が関東管領上杉憲忠を暗殺したことから起こる、足利成氏と上杉氏との24年間に亘る戦いである。

享徳3年（1454年）12月に上杉憲忠を暗殺した足利成氏は、翌年の康正元年（1455年）1月には鎌倉を発ち、その月の内に府中市分倍河原で上杉軍と全面戦争を行い、それに足利成氏が勝利すると、敗走する上杉方を追って2月に熊谷市村岡に到着し、3月には古河に入り、上杉氏勢力との長い戦いが続けられることになる。この古河に入って以降、足利成氏は古河公方と呼ばれるようになった。古河は以降、5代にわたり関東足利氏の本拠地となるのである。

亥年である康正元年（1455年）こそ、前年の暮れに起こった暗殺から引き続き、関東全域に突然戦乱が起こった年となる。

新井堀の内遺跡が所在する蓮田市は、当時は扇谷上杉氏の勢力範囲であったと考えられる。とこ



第13図 古河公方と両上杉氏の勢力図
(長禄年間ころ)(埼玉県1993一部改変)

ろが、前述した分倍河原の戦いで当主である扇谷上杉顕房が戦死しているのである。そのような混乱の中、埋蔵銭が埋められたとも考えられる。

また、当遺跡は古河公方側が山内上杉氏と扇谷上杉氏を分断するうえで重要な地域で、古河公方側の勢力はたびたび元荒川まで及び、元荒川のすぐ東に立地する当遺跡は、古河公方勢力が元荒川を越すことを防ぐ重要な場所であった可能性が高い。第13図は、長禄年間（1457～1460年）ころの、古河公方と両上杉氏の勢力図である。遺跡が立地している地域が、両勢力の中間地であることがわかる。

以上から、大量の銭貨を隠置した「いのとし」は、康正元年（1455年）の可能性が高い。木簡には、いのとしの後に三月と書かれ、それは足利成氏が古河に入った月であることから、一刻の猶予がなかったことをあらわしているとも言えるのではないだろうか。

おわりに

報告書を刊行した時点では、埋蔵銭の持ち主については、館の主と伝わる野口氏が岩付太田氏である太田資正に仕えてきたと伝わることから、年代的に祖先である太田道灌に関わる可能性を考えてきた。しかし、埋められた年が、康正元年(1455年)とすれば、太田道灌はまだ家督を譲られる前で、岩付城も築城されていない。

註1 大量に埋められた銭貨については、呪術的・宗教的な埋納物という考え(埋納銭と呼称)と、何らかの財産保全のために埋蔵されたという説(備蓄銭と呼称)がある。埋納銭や備蓄銭の呼称は出

銭貨が大量であることから、埋蔵銭の持ち主が相応の地位であったことは確実である。そうであれば、直接的に扇谷上杉氏に関わる可能性も考えられる。

遺跡はごく一部分しか調査されておらず、その全容は不明である。今後調査が進めば、館の性格が明らかになり、埋蔵銭についてもその意味合いが解明されるかもしれない。

土銭の性格を示す。中立的立場をとるため、報告書(埒埋文2020)と同様、「埋蔵銭」という名称を用いる。

引用・参考文献

- 愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史 別編 窯業3』中世・近世常滑系
- 稲村坦元編集 1970「岩槻巷談」『新訂増補 埼玉叢書』第二巻
- 鎌倉市教育委員会 1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』
- 騎西町教育委員会 2005『騎西町史』考古資料編1
- 栗橋町教育委員会 2008『栗橋町史』第三巻 資料編一 原始・古代・中世
- 栗原文蔵 1987「川里・船塚の備蓄古銭」『研究紀要 第9号』埼玉県立歴史資料館
- 栗原文蔵 1995「壺の石蓋」『研究紀要 第17号』埼玉県立歴史資料館
- 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2020『新井堀の内遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第464集
- 小金井市誌編纂委員会 1970『小金井市誌』Ⅱ歴史編
- 埼玉県 1993『新編埼玉県史図録』
- 埼玉県教育委員会 1988『埼玉の中世城館跡』
- 埼玉県教育委員会 1988『新編埼玉県史』通史編2
- 穴野佐紀子 2000「府中市宮西町の大量出土銭—並木西ビル地区を中心に」『多摩のあゆみ 第98号』財団法人たましん地域文化財団
- 白石祐司・村山卓 2011「平塚市博物館所蔵の常滑焼大甕—酢甕として用いられた中世の常滑焼」『品川歴史館紀要』第26号
- 鈴木公雄 2002『銭の考古学』歴史文化ライブラリー 140 吉川弘文館
- 谷口榮 1991「品川歴史館所蔵の常滑大甕」『品川歴史館紀要』第6号
- 蓮田市教育委員会 2005『宿浦遺跡、宿上遺跡、天神前遺跡、宿下遺跡—黒浜土地区画整理事業に伴う発掘調査2—』
- 蓮田市教育委員会 1998『蓮田市史』考古資料編Ⅰ
- 蓮田市教育委員会 1999『蓮田市史』考古資料編Ⅱ 古代・中世資料編
- 蓮田市教育委員会 2002『蓮田市史』通史編Ⅰ
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1994『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ』北部地域南半部の調査
- 府中市遺跡調査会 1998『武蔵府中 大量出土銭発掘の記録—並木西ビル地区の調査—』
- 府中市遺跡調査会 2001『武蔵府中 大量出土銭の調査概法—東京都府中市宮西町1-2出土—』府中市教育委員会
- 本郷恵子 2013『買物の日本史』角川ソフィア文庫
- 峰岸純夫 2017『享徳の乱』中世東国の「三十年戦争」講談社
- 村山卓 2019「板碑の成形技法—武蔵型板碑の背面加工痕—」『中世石工の考古学』高志書院

研究紀要 第35号

—設立40周年記念号—

2021

令和3年3月10日 印刷

令和3年3月18日 発行

発行 公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1

<https://www.saimaibun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社